

破綻を深めるJR全面外注化施策 ライフサイクル制度を粉砕しよう!

動労水戸

国鉄水戸動力車労働組合

水戸市三の丸三・一・三

発行責任者 石井真一 編集者 西納岳史

電話 029・227・6020

FAX 029・227・6291

ライフサイクルの面談では「駅には行かない」と言おう!

現在、職場ではライフサイクルの面談が始まっている。JR東労組は掲示で「通常のライフサイクルを守れ」と主張しているが、駅員↓車掌↓運転士から再び駅員という「ライフサイクル深度化」は、実際には就業規則にもなく、会社の制度ですらない。東労組との「覚え書き」があるのみだ。

会社は労働者本人の希望が必要だとして面談で身上調書を取っているが、これは強制配転だと言われないようにするためのアリバイ作りであり、身上調書には「駅には行かない」という選択肢がない。面談そのものが全くのインチキだ。ライフサイクルの期間が終了しても運転士に戻る保障はない。このようなインチキな制度は直ちに廃止あるのみだ。面談では「駅には行かない」「運転士を続けた」とはつきり主張しよう!

全面外注化と一体の ライフサイクル

そもそもライフサイクルの目的は何だろうか?それは「駅業務の全面外注化」だ。駅に十分な要員を配置せず、運転士をライフサイクルで駅へ配転することとで場当たり的に要員を確保する。こんな制度で果たして会社の言う「運輸のプロの育成」になるのだろうか?

鉄道業務はどれも特殊な業務であり、ライフサイクルのよくなその場しのぎの要員配置で回る仕事は一つない。輸送業務は一步間違えれば乗客へ

大きな影響を及ぼす業務だ。実際にライフサイクルに行った労働者から現状を聞いても「遺失物の対応ばかりで運輸のプロには程遠い」という声もある。

ライフサイクルの真の狙いは、出札・改札といった駅業務を外注化していくことだ。10月には検修・構内業務外注化によって3年前にMTSへの出向を強制された労働者に対し、出向期間の延長が強制されている。一方、出向を解除された労働者は、構内運転や仕業検査の仕事奪われ、日勤業務で余剰人員化されている。労働者の誇

りが奪われ、日常的に偽装請負を引き起こしている。鉄道会社は安全を軽視し、事故が起きても誰も責任を取らないどころか、労働者に全ての責任が押し付けられている。実際に勝田車セにおける2月の構内脱線事故、そして土浦における無資格者の運転という事故・事件が引き起こされている。こんなことが許されているのだろうか?

絶対反対の闘いこそが 職場の団結守り抜く道

一方では、闘わない労働組合の幹部が、自己保身ばかりを考え「会社は逆らっても仕方ない」「反対ばかり言っても仕方ない」などと、労働者の怒りを抑えつけ、団結を破壊している。長年誇りを持って鉄道の安全を守ってきた労働者が、エルダーの枠をめぐってイス取りゲームに加担させられている。労働者を分断することこそが会社の目的であり、闘わない労働組合によって、外注化が強行され、低賃金・非正規職にされていく。事故を承知で外注化を進める会社、それを黙認する労働組

合の責任は重大だ。

労働者の誇りを奪い、生活を破壊し、鉄道の安全を脅かす外注化は今すぐ中止し、仕事と労働者の両方をJRに戻せ!これが動労水戸・動労総連合の方針だ!

外注化反対ストに 敵対するJR東労組

外注化・ライフサイクル粉砕、被曝労働拒否の闘いに応え、新たに3人の青年が動労水戸に結集した。彼らは労働者全体の置かれた状況を真剣に考え、全ての労働者と共に生きるために闘いに立ち上がっている。

その一方、9月28日の動労水戸の「外注化粉砕・強制出向の延長絶対反対」のストライキに対し、東労組は「他労組のストに対してMTS大子事業所の組合員に業務命令」なる掲示を出した。東労組は昨年12月にも「絶対反対ばかり言っているも、組合員には何も残らない」などという、動労水戸を批判するような掲示を行っている。

動労水戸は国鉄分割民営化以降、会社からの組合差別にも一歩も引かず、鉄道と労働者の安全を守るために徹底して闘ってきた。鉄道や労働者の安全を脅かす会社施策ともいって闘うことなく、自己保身ばかりを考えた、目の前の問題から

11・1全国労働者 総決起集会

11月1日(日) 正午より
東京・日比谷公園 野外音楽堂

☆1047名解雇撤回・JR外注化阻止

☆戦争と民営化の安倍政権を倒せ!

目を逸らす組合に批判されることは何もない!労働者にとって1ミリでもマイナスになる攻撃に妥協など必要ない。徹底して闘うことこそ労働組合の役目ではないだろうか?

おかしい!とはおかしい、嫌なものは嫌だとはつきり主張しよう。今こそ全ての仲間が動労水戸に結集し、共に闘おう!



組合バーベキュー大会を開催(10月3日・大子町)